

研究協力校としての取組

長岡市立栃尾東小学校

I 本校の課題

26年度末、27年度初めの全国学力学習状況調査・NRTのデータから、本校の課題は次の3点と捉えた。

1. 学力の2極化が顕著であり、学力が低い子どもは、特に学習全般に対する興味・関心・意欲も低い。
2. 既習事項や既知の情報を活用して考えることが不十分で、また根拠をもった考えをしっかりとてない。
3. 家庭学習や読書習慣の定着ができていない。

そこで、以下の4点を課題解決策とした。

1. 国語科（説明的文章を学習材とする授業）に絞った授業改善の研修を行い、思考力、判断力の基礎を育てる
2. 総合的な学習の時間や特別活動の充実を図り、知的好奇心を醸成するとともに、国語科とリンクさせたカリキュラムを開発する。
3. 誰でも分かる授業を行うためのUDLに取り組む。
4. 中学校区や家庭との連携した学習習慣定着を図る

II 研究主題

課題解決策1と4を受け、以下のように研究主題を設定した。

**問いをもち、解決方法を探る子どもの育成
～追求を促す授業づくりを通して～**

III 研究の内容

説明的文章の授業改善の視点として大きく以下の3点を設定した。

- ①単元構成の段階では、論理展開・論理構造のモデルとしての教材文（学習材）から学び、学んだことを生かして、自分の文章構造を考えたり、発信したりできるようにした。
- ②単元のゴールとして、「子どもの実生活に生きる課題の解決」を設定することにより、より主体的な学びができるようにした。
- ③毎時間の授業では、自力解決、交流、振り返りの機会を設定することにより、追求課題を解決できるようにした。

IV 研究の方法と授業の実際

1. 単元構想とナビゲーション

「読む」と「書く」を行き来する単元づくりを構想するとともに、子どもたちが毎時間の意味付けを捉えることができるように単元ナビゲーションを提示した。

単元構想

〈事例1 5年1組「〇〇博士になって紹介文を書こう！」(10月)〉

〈実態・現状の課題〉 5年 2学期

- ・「生き物は円柱形」では、筆者の主張を強めるための段落の役割(反論の反論)について気付いた児童が多くみられた。
- ・板書の視写や他者の考えを聞くことに留まり、学びの姿勢が受け身になっている子どもが多い。

言語活動のアイデアをどんどん出しましょう。こんな学習活動をしたら楽しそう。(力が付きそう)。

段落ごとに短冊を作り、ばらばらにして子どもに読ませ、文末の表現に注目させながら問いと答えの3つのグループに分ける。

短冊をどのような順序で並べると文章が完成するかを、叙述をもとに話し合う。

〇〇博士として認定されるために説得力のある文章を書こう。

時数は 12時間扱い。

第0次(1H)

- ・〇〇博士の〇〇にあてはまるものを短になって児童に思いつくだけ挙げさせる。
- ・ばらばら短冊を封筒に入れ、子どもに渡す。家で音読させ、わからない漢字は自分で調べて読み仮名を振ってくる。

第1次(1H)

- ・博士とはどのような人のかを言うのかを問いかけ、学問やその道の知識に詳しい人であることを提示する。「お天気」「物知り」など。
- ・「自分が興味のあることについて紹介して、〇〇博士を目指そう」と単元を貫く学習課題を設定し、子どもの意欲的な活動につなげる。
- ・博士と言われるためには、物事をよく知り、説得力のある文章で相手に伝えなければならない。「天気を予想する」を読み、教材の筆者は「お天気博士」であることから、どのような文章を書けば説得力が増し、相手を納得させられるか学んでいく。

第2次(6H)

- ・ばらばらになっている短冊を読み、叙述や接続詞等を根拠として、「天気を予想する」の本文を完成させる。
- ・なぜ問いと答えが繰り返された構成になっているのかについて考え、筆者の論の進め方の意図やその効果を考える。
- ・グラフや図を用いてデータを示していることの効果について考える。

第3次(4H)

- ・〇〇博士として認定されるために、効果的な資料を用いて説得力をもたせ、学んだ文章構成で400字から600字程度の主張を書く。
- ・用いている図表やグラフが適切であるか吟味し、データを用いながら説得力のある文章を書くことができる。
- ・名前を伏せて廊下に主張文を張り、ほかのクラスや学年の人に〇印の部分に色を塗ってもらう。
- ・最優秀博士を決めて、なぜ投票が多かったのか、どこが良かったのかを読み合う。

〇単元のネーミング。
「〇〇博士になる！」

〇帯単元? 他教科との関連は?
・「〇〇博士といえは?」
というお題で班でファシリテーションを行う。
・国語と並行して自分が詳しく知りたい事象についてパソコンで調べる活動を行う。

〇評価。
・構成や使用する資料を考えて主張文を書いている。
・主張文の他の学年の人からの印の数。
・友達の見張文を読んだ感想。

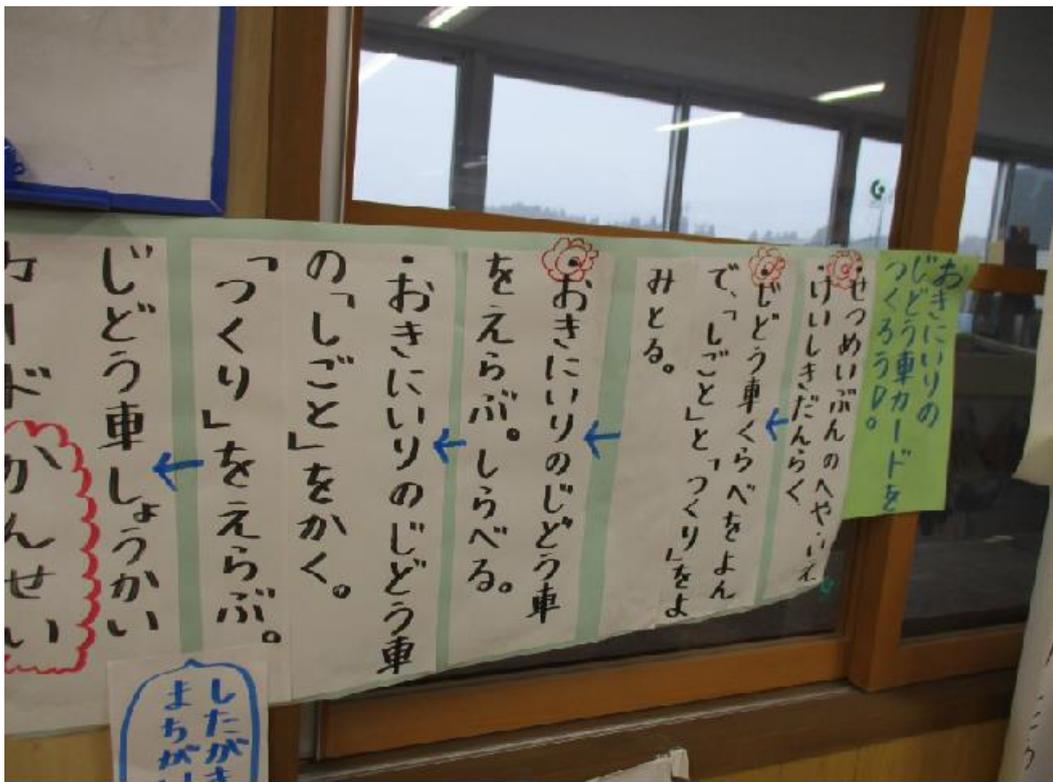
単元終了後に達成したい子どもの姿(言語活動を終えた後に身につけている言語力・目標)

- ・自分の主張を効果的に説明するための文章構造を理解することができる。
- ・自分の主張を効果的に説明するためのグラフや図など資料を選ぶことができる。
- ・自分の主張について表やグラフなどを効果的に用いて、読み手に説得力をもたせるように書くことができる。

授業者自身が、「どんなことに興味をもっているのか」「どのくらい文章構造を意識しているのか」等、子どもの実態を把握し、知的好奇心や意欲を持続しながら学習を進めるにはどうしたらよいか、小ステップや単元のゴールを意識して構成した。

子どもが学習の見通しをもつための単元ナビゲーション

〈事例1 1年2組「おきにいりのじどう車のしょうかいカードをつくろう」(11月)〉



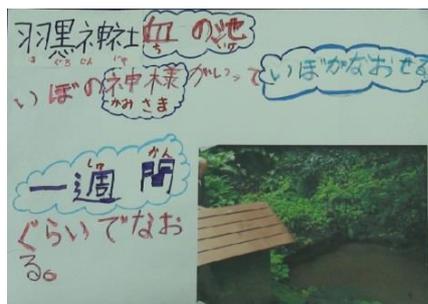
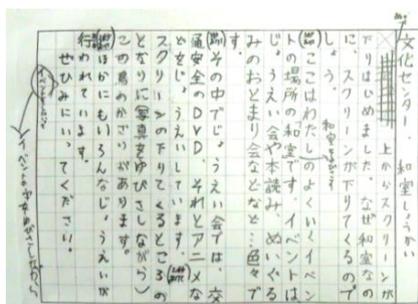
子どもと授業者が一緒になって毎時の活動を確認することで、単元全体の流れの中での本時の位置やその時の学習活動の意義を理解し、「今日は、お気に入りの自動車の『そのために』に合った仕組みを見つけるんだ」のように目的意識をもたせることができた。

2. 実生活に生きる言語活動と論理展開の基礎を培う授業

単元のゴールに、「全校児童に読んでもらいたい本を作成する」「児童会、学校行事に提案する」「総合との合科的な単元づくりの場で発表する」等、子どもが必要感をもち、主体的に取り組む「実生活に生きる言語活動」を設定した。

実生活に生きる言語活動と論理展開の基礎を培う授業

〈事例1 3年生「東小のよさを伝えよう」(5~9月)〉



「誘いかけ」「(来てみての) お楽しみ」の文章構成で、栃尾南小の3年生に発表した。「南小の人たちに何を伝えたらよいのか」「南小の人が自分の目で確かめたいと思う文章にするにはどうしたらよいのか」と相手意識をもたせることができた。

3. 45分間の授業の構造化

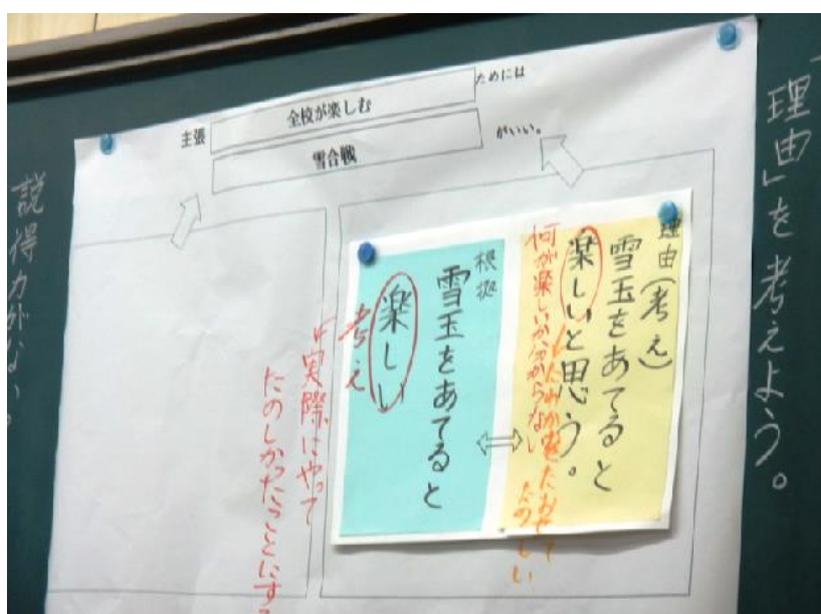
(自力解決と交流による深化・拡充、振り返りによる「学びのメタ認知」)

認知を促す追求課題を考慮し、45分の中で「一人一人が問題意識をもつ自力解決の場」「自分の考えを吟味する交流の場」を設け、思考の深化や拡充を図った。ワークシートを工夫したり、協同的な学びを意図した交流活動を設定したりした。

さらに、追求課題毎に振り返りをさせ、「ゴールの言語活動に向かって学んだこと」「交流によって自分の考えが構築されたこと」等を実感できるようにした。また、この振り返りを行うことで、「まだよく分からないこと」「今後、単元のゴールに向かうためにすべきこと」等の課題意識をもち、「問い」が連続することを目指した。

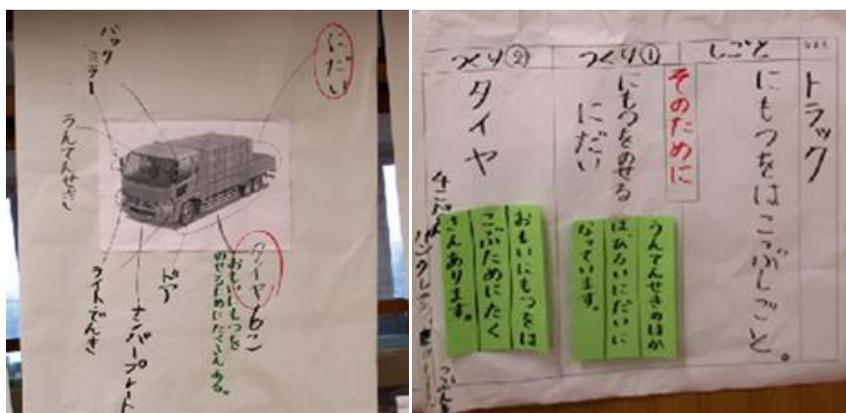
自力解決を促すワークシート

〈事例1 6年2組「冬の杉の子アドベンチャーの提案をしよう」(9月)〉



「事実が『根拠』になること」「事実をもとにした考えが『理由付け』になること」を意識すると、より多くの人を説得させる主張になることに気付いた。また、このワークシートが交流を促す視覚的情報となった。

〈事例2 1年2組「おきにいのじどう車のしょうかいカードをつくろう」(11月)〉



「そのために」を強調したワークシートを活用することによって、集めた情報(写真左側)を取捨選択することができた。

以下の5点が成果として挙げられる。

- ①単元ナビゲーションの提示により、「今日（本時）は、ゴールのために『何をするのか』をはっきりさせる」ことができ、子どもの追求意欲を高めた。
- ②「自分の意見が全校の活動に反映されるかもしれない」「南小（隣校）の人に来てもらうためにどんな発表内容がいいのか」等、子どもに相手意識を強くもたせるができた。
- ③文章の構造を理解するためのワークシートを活用することで、段落相互の関係や段落の役割を知ろうとするために、文章を読み返す行為を促した。また、「主張」「根拠」「理由付け」等のロジックの要素を関係づける思考を促した。
- ④交流活動で自分の考えを伝えるために、根拠や理由付けに対する意識を高めた。
- ⑤毎時間毎、追求課題毎に、丁寧に振り返りをさせることで、「次に何をすべきか」「この次はできそうなことは何か」と、主体的な追求を促すことができた。

2. 課題

以下の2点が挙げられる。

- ①交流の場では、自力解決した結果を伝えるだけに留まり、「自他の考えを比較する」「自他の考えを組み合わせる」等、自分の考えを吟味する姿が少なかった。
- ②学年内の協力体制が不十分で、「子どもがプリントを活用したときの様子」「自力解決と交流の時間配分」等の情報を共有できない面も見られた。

VI 授業のUDLの推進

授業者も、UDLの視点で日々の授業改善に取り組んだ。チェックリストをもとに、「全職員共通の『スタンダード』（5観点）」と「授業者が大切にしたいと考えている『セレクト』（2観点）」を設け、授業者の内省の機会とした。（年4回）

教職1年目の授業者Tのチェックリスト

		項 目	11/16	11/17	11/18	11/19	11/20	11/24	11/25	11/26	11/27	達成度
スタン ダード 5	1	【教室環境の整備】 1日のスケジュールを掲示して、朝の会で確認する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	2	【あたたかい学級】 友達のよさや努力していることを見つけたり、認めることができた子どもを称賛するようにしている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	3	【聞き方】 具体的な言葉で、簡潔に説明を終了している。（長い説明にならない）	○	△	△	△	○	○	○	○	○	6
	4	【思考・表現】 1時間の授業のねらいや◎、活動の流れを板書や掲示物で示している。	△	○	○	○	○	○	○	○	○	8
	5	【思考・表現】 子どもの集中時間を考え、授業を複数の活動に分けてテンポよく進めて2【学習準備】 授業開始時刻に席に座り、教科書等を見て待つことを指導し、子どもが実行できている。（○できた、すぐ授業開始 △できない）	○	△	△	△	○	○	△	○	○	5
セレ クト 2	1	7【書く】 作業や活動をする時間を確保し、終了時間を明確にする。	△	○	○	○	○	○	△	△	○	6
	感想	授業開始時刻には席についていても、教科書やノートを開いて待っているということが徹底できていなかった。引き続き言葉掛けを行い、習慣化させていきたい。また、児童が「この時間に何を行うのか」を明確にすることによって授業に対する集中力が増すことを実感した。										<評価基準> できたら○、だめなら△を記入します。○の数を数え、9個以上なら合格です！

授業者 T のクラスの様子



45分の学習の流れを示したこと、終わった活動を消去していくことで、次の活動の見通しを明確にもたせることができた。また、毎日、一日の活動、週の活動、当番の視覚化も心がけたことで、子どものチャイム着席を定着させた。一斉にスタートすることで、前向きに課題に取り組む姿も多く見られるようになった。

Ⅶ 次年度に向けての展望

授業研究から見えた課題を受けて、今後の展望として以下の2点を掲げた。

- ①「交流の場における思考」を視覚化するために、発表者が語る出来事や考えをグラフィック化する活動方法を検討する。
- ②学年内の協力体制を強化するために、学年で一つの『生活に生きる言語活動』を意識した単元構想を構築するとともに、同単元の中で授業を公開し合い、「追求課題の提示」や「ワークシートの活用の在り方」等の改善を図る。